

所長挨拶

今昔の感

さいとう たろう
齋藤 太郎

(日吉メディアセンター所長)



ドイツの作家ヨースト・ニッケルに『図書館の中』というブラックユーモア仕立てのラジオドラマがある。主人公は、『楽しい料理』という本を借りようと図書館にやってきた男。目的の本を求めて、無限に続く書棚の列が作り出す複雑怪奇な迷路の中をさまよううち、彼は館内のあちこちに根城を構えて奇様な活動に精を出す図書館員たちと次々に出くわす。

文学担当で偏執狂気味の館員の長広舌を逃れ、色情症らしき心理学担当女性館員の誘惑をかわしたのち、主人公は、全身を蜘蛛の巣に覆われて身動きできずにいる男に行き当たる。彼は昆虫学担当の館員であって、誰も足を踏み入れぬ書庫の一隅で、自分の身体を使ってクモの繁殖に関する研究を進めているのだ。奇矯な館員たちに翻弄されて、ますます迷宮の奥深くへと踏み込んで行く主人公が最後に出会うのは、図書館神「ビブロス」に仕える祭司と化した館員である。彼は、「利用者が図書を汚損するなどして、ビブロスの怒りを買わぬよう」、貴重な写本を引き裂いて犠牲の祭壇に捧げるのである。この館員から、『楽しい料理』が図書館長の手もとにあることを教えられ、館長室を目指してゆく主人公は、腐りかかった階段から転落して気を失ってしまう。

失神から覚めて図書館長と対峙した主人公は、この図書館の異常性を訴えるが、図書館長は、指摘された問題点はすべて意図的なものであることを明かす。「図書館は利用者のためではなく、本と館員のためにあるのですよ。ですから極力利用者にとって入りにくく、使いにくいように出来ているのです」。

主人公は最後に悟ることになる——自分が意図的にここまで誘い込まれたこと、そしてそれは、料理好きな館長が、不健康になりがちな図書館員に栄養をつけてやるための食材としてであることを……

前置きが長くなったが、この悪夢のような図書館の対極にあるのが、筆者が昨年10月より所長の任にある日吉メディアセンターであるといえよう。実際、

内情を多少知りうる立場になってみて、日々驚きを新たにしているのは、図書館スタッフが、図書館を利用者にとって使いやすく刺戟的な場とするため、どれほど日々模索を続け、新たな試みを行っているかということである。

教養教育段階の学生を抱えるキャンパスの特性上、日吉の図書館には学習図書館としての機能が強く求められるわけだが、日吉図書館が特に力を注いでいるのは、学生が本に親しみアカデミック・リテラシーを身につけて、自律的な学習者へと成長するよう手助けをすることである。

軽い読み物を集めた「バルコニー・コレクション」には、自然に読書の楽しみが身につくようにという配慮がうかがえるし、外国語学習に意欲的な学生のためには、多読用読本コーナーが用意されている。教科書・参考図書を一箇所に集めた教科書コーナーは、授業と図書館との連携に寄与している。

学生が蔵書の構築に関われるようにするための工夫も、さまざまにこらされている。新刊案内を展示して購入図書の希望を募っているだけではない。図書館公認学生ボランティアグループ「図書館フレンズ」は、書店への「選書ツアー」を行ったり、独自のテーマに基づいてお薦めの図書を集めた「冒険する本棚」を設置したりと、ささやかながら図書館運営の一翼を担っている。こうした学生との協働は日吉図書館の特色の一つと云っていいだろう。教養研究センター設置授業「アカデミック・スキルズ」の修了者が、レポート等に関する学生からの相談に答える「学習相談」は半学半教の端的な実践である。

現在の日吉図書館が建つ以前に日吉で学んだ者としては、昔日と現在のあまりの違いにほとんど目眩を覚えるほどである。所長の任期も半ばが過ぎたが、変わりゆく図書館に驚かされてばかりで終わってしまったのは情けない。せめて一つなりとも、新しいものを加えられればとは思いますが、さて叶うだろうか。